

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Case Study on Life History of Two Aboriginal Men in Arnhem Land, North Australia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松山, 利夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004292

アーネムランド・アボリジニの生活史
——ジナン族ガマディ・アウトステーションに
居住する2人の男性の事例——

松 山 利 夫*

A Case Study on Life History of Two Aboriginal Men
in Arnhem Land, North Australia

Toshio MATSUYAMA

One Djinang man, Mr. WunuWun, a leader of Gamardi outstation, visited to Darwin and Katherine when he was a teenager, because he wanted to work in the Army or Airforce, which were stationed at Darwin in 1944. He stayed in white society for 10 years. Then Mr. WunuWun returned to his country in Arnhem Land. But he did not stay there. He moved to Maningrida, one of the Aboriginal towns in Central Arnhem Land, in 1957.

Around 1968 he and three kinsmen started to build-up Gamardi outstation, in Djinang territory, which was WunuWun's mother's country. He has stayed at Gamardi ever since.

He has purchased some modern items, such as TV-Video set, two trucks and other things. He received 5,000 A\$ per year from his bark-paintings, which he sold through the Arts and Crafts Centre to white people in cities.

The other Djinba group man, Mr. BulunBulun, has stayed in Gamardi outstation since 1976, with his wife, who is a sister of Mr. WunuWun. He spent everyday for hunting, drawing bark-paintings and joining ritual ceremonies. He had no experience of city life.

Nowadays he owns modern items more than Mr. WunuWun. He bought a TV-Video set, a generator, a truck, a refrigerator (unusable), an electric fan and so on, from the income obtained from selling his bark-paintings. (He gets 5,000 A\$ per year).

* 国立民族学博物館第1研究部

BulunBulun has the most modern items in Gamardi. This must suggest that he is still yearning for “White Culture”.

On the other hand, he is trying to make a new outstation at his country, to stay there with his kin's people, so as to spend everyday hunting, gathering, painting and joining ceremonies.

In this report, I describe their life histories and discuss their changing life-style. I demonstrate that; these two men still maintain hunter-gatherer culture, essentially; and this aspect of their life histories form a striking contrast to some Aboriginal groups resident on non-Aboriginal Land or Reserves, such as the Aboriginies in the Kununurra Region, Western Australia [SHAW 1986].

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. はじめに | (2) ウヌウン氏の生活史 |
| (1) 問題の所在 | (3) ブルンブルン氏の生活史 |
| (2) アボリジニの生活史調査 | 3. 生活史の分析 |
| 2. 生活史をつづる | 4. まとめ |
| (1) 生活史の背景 | |

1. はじめに

(1) 問題の所在

優勢な白人文明との絶えまない交渉を余儀なくされた狩猟採集社会や一部の農民社会では、その優勢な文明の影響ゆえに、彼らの文化がおおきく変容した。この種の文化変容は、終局的には、それぞれの民族がもった価値体系や社会構造の崩壊をもたらすという。そして、その結果生みだされる自民族文化を喪失した集団は、現代国家に統合され吸収されるといわれてきた [MURPHY and STEWARD 1968: 215-233; GOULD *et al.* 1972: 265-279; MURPHY 1979: 200-205]。

1788年、初めてヨーロッパ文明に接触して以来、2世紀のあいだに、オーストラリア・アボリジニもさまざまな局面での変容を強いられてきた。これを人口論的に論じた小山は、1788年から1921年にかけてノーザン・テリトリーを除くオーストラリア全域で65%を越えるアボリジニ人口の減少があったことにもとづいて、この時代に彼らの社会がすさまじい勢いで崩壊していったと述べる。そして、アボリジニはこのまま消滅するか、滅亡をまぬがれたとしても、彼らは自身の文化をうしなった集団としてオーストラリア社会の最下層を形成するという、当時からの白人の考えかたを紹介する。

そのうえで、1920年代から60年にかけて増加のきざしをみせはじめたアボリジニの人口が、60～81年には急激な伸びをみせたことを明らかにし、現在は彼らの社会があらたな編成期をむかえていると述べている [小山 1988: 37-68]。

このような状況をむかえた1981年には、アボリジニの人口が約15万人を数えるにいたる。しかしその75%は、非アボリジニ系の都市に居住する。狩猟採集に基礎をおいた生活を営む人びとは、アボリジニ人口の25%にすぎない [FISK 1985: 2]。この少数の人びとは、1920年代はじめから50年代末にかけて政府が各地に設置した保護区 [PETERSON 1982: 442-443] に生活する。

そのうちのひとつ、ここでとりあげるノーザン・テリトリー州のアーネムランド・アボリジナル・ランドは、1920年代に面積約 6,000 km² の保護区としてはじまり、31年にはキリスト教会各派をはじめとする諸団体の努力によって、それが 79,000 km² にひろげられる。さらに76年、連邦政府がノーザン・テリトリー州におけるアボリジニの土地と聖地を定義し、彼らの土地権を認めたアボリジニ土地権法 (Aboriginal Land Rights (Northern Territory) Act, 1976) を制定したのをうけて、現在のアーネムランド・アボリジナル・ランド (面積は 96,000 km²) が成立する。このアーネムランド・アボリジナル・ランドに居住し、狩猟採集にしたがう10,000人余りのアボリジニは、都市に暮らす大多数のアボリジニとともに、オーストラリア連邦という国家に統合されていることになる。

それは次の事実からも明らかである。アーネムランド・アボリジナル・ランド (以下ではこれを単にアーネムランドと表記する) の場合、76年のアボリジニ土地権法の制定につづいて、80年にはその沿岸 2 km を、アボリジニのための水産資源の開発地として囲い込むことが認められている [PETERSON 1982: 441-462]。さらに彼らは、連邦政府の社会福祉省 (Department of Social Security: DSS) をつうじて失業保険や寡婦保険、子供の養育保険などの社会保障金を70年代はじめには受給している。アーネムランドの中央部に位置するマニングリダ Maningrida 管区の居住者、約1,200人を例にとると、現在では有資格者の75%がなんらかの社会保障金をえているのである [FISK 1985: 33-41]。

しかし彼らは、狩猟採集に基礎をおく文化を崩壊させるという終局的な局面にたちいたってはいない。むしろそこでは、アウトステーション運動 (後述) をとおしてその文化を意図的に復興するという、あらたな動きがみられるのである。

この報告では、以上のような状況にあるアーネムランド・アボリジニのなかで、ジナン Djinang 族 (言語グループ) がマニングリダ管区に建設したアウトステーション、

ガマディ Gamardi に暮らす2人の男性をとりあげ、彼らの生活史を記述する。そして、彼ら自身が語る言葉のなかから、優勢な白人文明に対面し、貨幣経済に急速にまきこまれていった狩猟採集民の、今世紀における生活の変容の過程を明らかにしたい。

(2) アボリジニの生活史調査

生活史には、当該個人が経験する個人的なできごととともに、その個人がなう社会的役割をつうじて、あるいはそのときどきの歴史的な状況のために、社会の構造と密接に結びつけられた体験が含まれる [MILLS 1959: 161-162]。したがって生活史は、相補的な関係にあるこの両者——個人的経験と社会的な体験——を記述することになる。それはアボリジニの側から、彼らの生活の変容を明らかにするはずである。

しかし、神話のなかに現実の生活の規範を求めてきた [BERNDT 1984: 122]、無文字社会に生きるアボリジニの生活体験を、時間の経過をふまえた生活史として採録することは容易ではない。さらに、体面をおもわずアボリジニの社会では、失敗を含む過去の個人的・社会的な体験を第三者に語ることが少ない。それにもかかわらず、筆者が彼らの一応の生活史を記録できたのには、つぎのような経緯がある。

筆者がアーネムランドの中央部マニングリダ管区に位置するジナン族のアウトステーション、ガマディ（写真1）での調査を開始したのは1982年である。当初は彼らの狩猟採集活動、獲得した狩猟動物の配分、これらの野生食糧と小麦粉や缶詰などのマーケット・フーズとの構成比を、調査の主要な課題にしていた [松山 1988a: 613-646]。

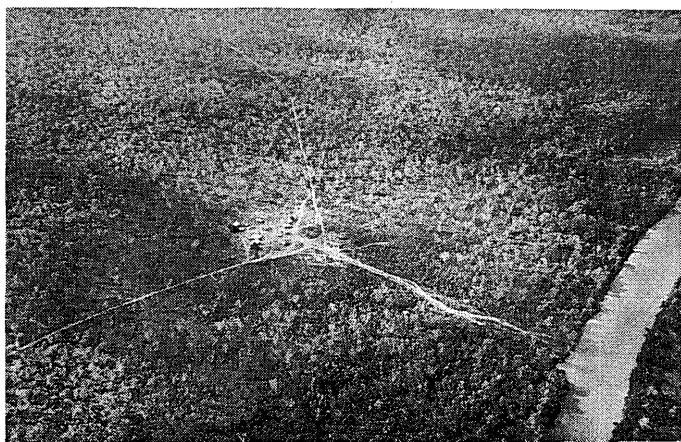


写真1 ユーカリ属の樹木が優占する森にひらかれたガマディ・アウトステーション。右はブライス川。

この調査をおこなっていた84年、筆者はこのガマディ・アウトステーションのリーダー、ウヌウン WunuWun 氏によって、男女それぞれ4つずつある婚姻クラスのうち、彼の息子にあたるゲラ Gera が与えられ、筆者はウヌウン氏の息子になることができた（アーネムランド・アボリジニは他者へのよびかけに、この婚姻クラスの名称を用いる。よびかけに名前を使用することはほとんどない）。

これが契機となって、筆者とウヌウン氏、およびこのアウトステーションのメンバーでウヌウン氏の姉を妻にもつブルンブルン BulunBulun 氏との間に、より親密な関係が成立する。これにもとづいて両氏は、筆者との日常的なさまざまな会話のなかで自らの名前の意味やガマディに暮らしはじめたいきさつなどを、別べつの機会に断片的に語りはじめた。そのなかで彼らは、たとえば「若いころはフットボールに夢中だった」というようにして、しだいに過去の生活体験に触れるようになっていった。

この2人の生活体験は、筆者がガマディに滞在した84年と86～87年にかけてのそれぞれ4カ月と、88～89年の2カ月間にあつめられた。後述する両氏の生活史は、問わずがたりに彼らが語った生活体験の断片の記録ノートにもとづいている。会話はおもに英語でおこなわれた。

ところで、2～23人と滞在する成員が流動的なガマディで（成員の全数は23人）、インフォーマントがこの2人の男性に限られているのには、つぎのような事情がある。すなわち、インフォーマントである2人の男性とその妻たちを除く人びとは、ガマディへの出入りがはげしく、滞在期間が短い。そのため、彼らと筆者のあいだに、生活体験を語れるほどの親密な関係が確立できなかった。また、ウヌウンとブルンブルン両氏の妻たちの生活体験について触れていないのは、筆者と彼女たちとの緊密な会話が好ましいことではないとする、両氏の忠告にしたがったためである。ただし、彼女たちとウヌウン氏の息子となった筆者のあいだに忌避関係はない。

こうした条件のもとで採録した生活史は、十分なものではない。それでもなお、この2人の男性の生活体験からは、今世紀におけるアーネムランド・アボリジニの生活の変容の一端が明らかにできるはずである。ここでは2人のインフォーマントが話したそのままの事柄を、可能な限り時間の経過にそくして記述することとした。後述のウヌウン氏とブルンブルン氏の生活史の時期区分の基準がことなるのはこのためである。

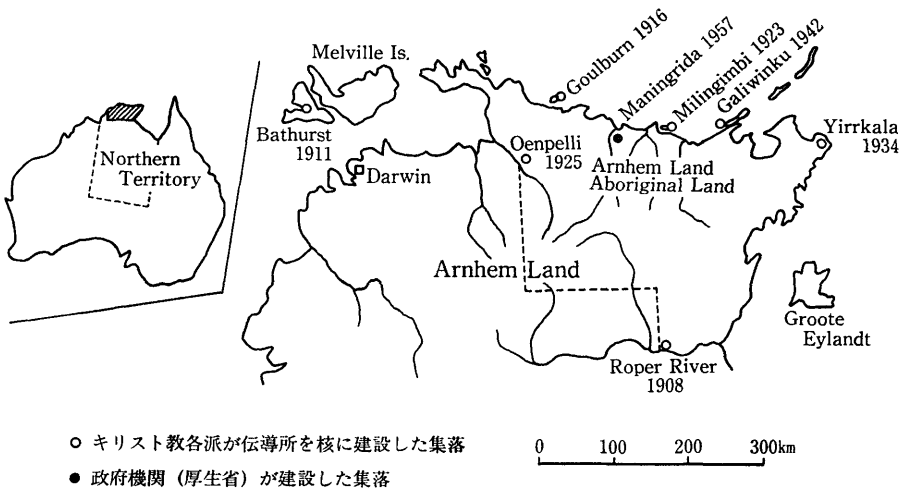
2. 生活史をつづる

(1) 生活史の背景

アーネムランドでは19世紀末から20世紀初めにかけて、各地にキリスト教会各派による伝導所の建設があいついだ。それは、移動性のたかい生活をおくるアボリジニを伝導所の周囲に定着させ、キリスト教を布教し、医療をほどこし、教育をおこなうことを目的とした（このような集落を以下では「まち」と表記する）。しかし、19世紀末に建設されたこの種の「まち」はアボリジニに敬遠され、数年から十数年のあいだにあいついで閉鎖される [COLE 1979: 82]。

その建設と経営が本格化するのは、20世紀にはいつてからである。それは1908年にアングリカン教会派 (Anglican Church Missionary) が、アーネムランド南東部のローパー・リバー Roper River に「まち」を建設したことにはじまる (図1)。その建設にあたってアングリカン教会派が標榜したのは、宗教に直接かかわる部分を除くと、当時さまざまな形をとってあらわれた「非道徳的生活」からアボリジニを保護することであった。

こうした主張が成立するのは、当時のアーネムランド南東部では、牧畜業の北への展開にともなって土地や家畜の管理をはじめアボリジニの雇用をめぐる、白人との間に深刻な緊張が生じていたからである (アーネムランドは、このころ牧畜業者に



数字は建設年を示す。

図1 アーネムランドにおける集落の建設

ースされる)。それはアボリジニによる牧牛のハンティングや、それに報復する白人のアボリジニ狩りといった極端な行為とさえなってあらわれた。そうした状況のなかで、アングリカン教会派がアボリジニの保護を標榜したのは当然でもあった。

それとともに、この「まち」の建設に際して標榜されたもうひとつのことがらは、「まち」に居住する限り、アボリジニは白人社会への同化策から自由であるということであった。この同化策は長く白人のアボリジニ観として定着しており、1961年にはこれが連邦政府の公式のアボリジニ政策に採用される¹⁾。この白人のアボリジニ観からの解放を主張した典型が、1911年バサースト島 Bathurst Is. につくられたカトリック教会派の「まち」であった [COLE 1979: 79-119]。

これら教会各派の手になるもののほか、連邦政府の機関である厚生省 (Welfare Department) が建設した集落がある。それが1957年にアーネムランド中央部に設立されたマニングリダである。それは最初、数カ月間だけ開設される白人とアボリジニとの交易地点として1947年に設置された。その当時はワニ皮やアボリジニが製作したマットやカゴ、儀礼用具などが交易された [KYELE-LITTLE 1957: 123]。その後57年から、マニングリダは集落 (伝導所を核とした集落と同様に、これも「まち」と表記する) として経営される。それには、つぎのような事情があった。

ジナン族を含めてこの地域のアボリジニの多くは、当時、地理的な距離のおおきさから、すでに建設されていたゴールバーン Goulburn やオーエンペリ Oenpelli, ミリンギンビ Milingimbi の「まち」(図1参照) と日常的なかかわりをもたなかった。その彼らは、50年代に大量にダーウィン Darwin へ流出し、白人社会とのあいだにおおきな混乱を生じさせる。これを收拾し、この地域のアボリジニを同化させるために、厚生省は「まち」としてマニングリダを経営しはじめたのである [McKENZIE 1976: 236]。

このマニングリダには、設立翌年の58年300人のアボリジニが集住する。その人口は60年には9部族480人に増加し、69年には約1,000人に急増する [MEEHAN and JONES 1980: 131-157]。

1) 1961年、連邦政府が採用したこの同化 Assimilation 策は、アボリジニが白人に完全に同化することを求めた政策である。その後アボリジニ政策は、65年から伝統文化を認めようとしてオーストラリア社会への統合を促進させようとする統合 Integration 政策を経て、72年ごろには自己決定主義 Self-Determination 政策へと変化する。そして75年には自己管理主義 Self-Management 政策が採用されてきた。この自己管理主義政策は、アボリジニが自ら選択した生活を維持するうえで、なにをどれだけ、どういうかたちで援助してほしいかを申告し、それに応じて政府が援助をあたえるというものである [関根 1988: 309-310; 新保 1980: 138-140]。現在では、アボリジニの政治的な自立をめざした「アボリジニおよびトレス海峡島嶼民委員会」(Aboriginal and Torres Strait Islander Commission) を設置するための法案が検討されている [成田 1989: 1-19]。

こうした急速な人口の集中と、その結果もたらされた長期間にわたる異部族の混住とは、「まち」での生活に緊張を強いることとなった。アボリジニは、長期間にわたる異部族の混住という経験をもたず、それを生きぬく社会的なでだてももたなかったからである。これに加えて、60年代末のマニングリダでは、長老がもっていた権威がうしなわれ、社会的な秩序が混乱しはじめていた。当時この「まち」でも、アボリジニの文化は確実に消失するとみられていたのである [MEEHAN and JONES 1980: 131-135]。それはマニングリダにとどまらず、すでに建設されていたアーネムランドの各地の「まち」にも共通してみられた。

この状況は、「まち」をぬけだし故地(カントリー)にアウトステーション²⁾を建設してそこで生活することを、アボリジニに期待させることとなった。したがって60年代末から70年代前半にかけての時期、ある年齢段階にたったアボリジニには、アウトステーションは「建設すべきもの」であり、そこで「親族とともに生活すべき」である(あるいはそうすることがのぞましい)というような、内的なある種の力が働いたはずである。それゆえに、この時期におけるアウトステーション建設が運動(ムーブメント)とよばれたのである。

アウトステーションは、現実の世界でもあり彼らの祖先の精霊が暮らす世界でもある故地を存在のよりどころとするアボリジニの価値体系 [ELKIN 1981: 42; PETERSON 1975: 63] を背景に、長期間におよぶ多数の異部族の混住とそれにもとづく部族間の不和、急速な人口の増加、長老の権威の失墜、「まち」の経営にたずさわっていた白人との価値観の違いなど [COOMBS 1978: 131-149] によって社会が混乱しはじめるという、当時の歴史的な状況から生みだされたものである。それは70年代前半におけるアウトステーションの急激な増加としてあらわれる。

このアウトステーションの増加には、もうひとつ別の背景があった。それは72年に成立した労働党内閣が、アボリジニ問題省 (Department of Aboriginal Affairs: DAA) をつうじて、道路建設などの資金をはじめトラクターやボート、トラックを貸与し家屋の建築資材を与えるなど、以前にもましてアボリジニ社会への積極的な援助をはじめたことである。マニングリダでは、当初、「まち」の役場 (Maningrida Council) がその受けざらとなり、アウトステーション建設の援助を開始した。

その後、アウトステーションの援助部門は78年に役場から独立し、あらたに設けられたバウイナंगा・アボリジニ協同組合 (Bawinanga Aboriginal Corporation:

2) この時期以後、アボリジニがそれぞれの部族(言語グループ)の故地に建設した小集落を、「まち」に対して、アウトステーションとよびならわしてきた。

表1 マニングリダのおもな機関とその役割

役場 (Maningrida Council)
マニングリダの「まち」の維持と居住者へのサービス
上下水道の維持・管理
ゴミの収集と処理
住宅建設
道路の建設と維持・管理
発電所の維持
飲酒許可証の発行 などをおもな業務とする
開発協会 (Maningrida Progressive Association)
「まち」とアウトステーション居住者のための食糧品をはじめとする生活物資の移入と販売
「まち」のマーケットと売店の経営
アウトステーションへの食糧品の販売 などの業務
パウイナンガ・アボリジニ協同組合 (Bawinanga Aboriginal Corporation)
アウトステーション居住者への生活援助を業務とする
そのためのつぎの部門がある
自動車修理所 (Mechanical Workshop); トラック、ボートの修理と無線電話の修理と斡旋などを担当
社会保障部門 (Social Security); 失業保険などの社会保障金の給付を担当
リソース・センター (Resource Centre); 住宅・井戸の建設と修理などを担当
芸術局 (Aboriginal Arts and Crafts Centre); 工芸品の買い上げと販売、製作指導を担当
(これらの諸部門の多くは1978年前後まで役場に属していたが、アウトステーションの増加にともなって、あらたに設立された協同組合の業務となった)
診療所 (Health Clinic)
「まち」とアウトステーション居住者の健康管理と軽度の怪我・病気の治療
学校
3歳～12歳の子供の教育 (「まち」に滞在する白人の子弟を含む)

BAC) にうつされ、現在にいたっている。この協同組合 (BAC) と役場がもつ現在の機能は表1のとおりで、前者にはトラックの修理所と、79年から本格的な活動を開始するアボリジニ芸術局 (Aboriginal Arts and Crafts Centre) などが併設される。

こうした連邦政府の援助もあって、84年にはマニングリダ管区に26のアウトステーション (以下ではこれを「まち」に対して「むら」と表記する) が建設される。その地理的分布が統計的にランダムである [小山 1983: 56-57] のは、それぞれの「むら」が、彼らの故地に建設されていったからである (図2)。

60年代末から70年代前半における「むら」建設の動きは、アーネムランド全域に共通する。各「まち」の管区では、84年現在イルカラ Yirkara 11, ガリウインク Galiwinku 12, ミリンギンビ 8, ラマンギニン Ramingining 4, オーエンペリ 18 の「むら」を数えるにいたる [小山 1988: 60]。ただし、これらのなかには建設後ほどな

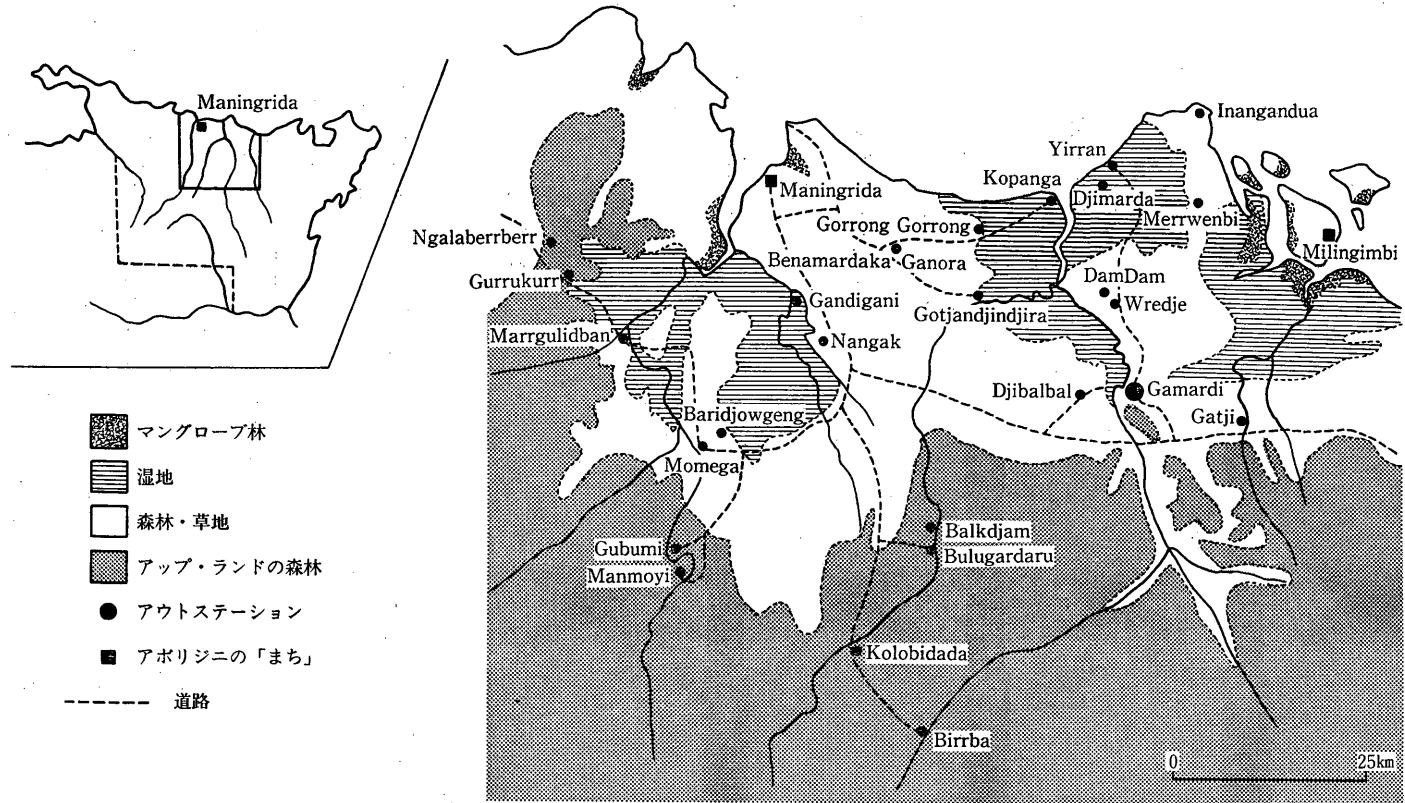


図2 マニングリダ管区におけるアウトステーションの分布 Altman [ALTMAN 1987: 2] による。

くして放棄されるものがあった。
 たとえばマニングリダ管区では、
 1973年以降の10年間に記録にあら
 われた「むら」は延べ34にたっす
 るが、77年には消滅するものがあ
 らわれはじめ（表2）、その存続
 期間は3～5年にすぎない。82年
 現在でも多くは3年を経過したに
 とどまっているのである。

しかし、「むら」が消滅する理
 由はすべてにわたって明らかなわ
 けではない。筆者が調べた限りで
 は、たとえば86年にジバルバル
 Djibalbal（図2参照）の南東5km
 に「むら」を建設していたレンバ

ルンガ Rembarunga 族のある家族（夫と2人の妻および3人の子供からなる）は、
 建設直後に夫が死亡したため「むら」の維持が困難になり、それを放棄した。残され
 た妻たちは、その後いったん「まち」にでて生活している。彼女らはあらたな配偶者
 をえ、その彼が「むら」をもっているか建設するかすれば、そこに居住することにな
 るという。

この例のように①「むら」のリーダーが「むら」建設の直後に死亡した場合のほか、
 ②当初は生活をともにするはずであった近縁の親族間に争いがおきた場合にも消滅す
 ることがある。いずれにしても、「むら」の建設と放棄はいまなおくりかえされてい
 るのである。

(2) ウヌウン氏の生活史

短期間に建設と放棄がくりかえされる「むら」にあって、ジナン族が1975年に建設
 したガマディは、存続期間がすでに10年をこえた。その建設に中心的な役割をにない、
 現在この「むら」のリーダーであるウヌウン氏（氏の名前は彼がもつ複数のドリーミ
 ング（トーテム）のひとつ、ある種の水草を意味する）の生活史を記述する。それに
 ききだって、「むら」の成員にマロ Marro（父）とよばれる彼の五十数年間にわたる
 おもな生活体験とそのときどきの歴史的な状況の概略を、表3に掲げておいた。これ

表2 アウトステーションの年変動

	アウトステー ションの数	居住人口	1ステーション 当たり平均人口
1973	6	260	44
74	7	?	?
75	11	?	?
77	15	579	39
80	21	318	15
82	23	458	20
	総数	新設	消滅
1973	6	6	—
74	7	1	—
75	11	4	—
77	15	6	2
80	21	11	5
82	23	6	4

バウイナンガ・アボリジニ協同組合 (Bawinanga
 Aboriginal Corporation) の資料による。

表3 ウヌウン WunuWun 氏の生活体験 () は推定年を示す

歴史的な状況	個人的体験
1880-82 パストラル・ブーム アーネムランド, 牧畜業にリースされる 1920 アーネムランド西部に保護区設定 1923 ミリングンビ・ミッション開設	
42 ダーウィン爆撃 N.T 政府アリスへ (45.9 まで) オーエンペリのアボリジニ, 大量にダー ウィンの陸軍が雇用 [COLE 1957: 47]	1930 メルウェンビに生れる 木皮画の技法を習得 (41) ガッチで成人儀礼 (42) ダーウィンへ オーストラリア陸軍 (食堂の下働き) オーストラリア空軍 (清掃作業員) 最初の妻と結婚 ガンダディア誕生 (45) キャサリンへ 牧童のための料理人
47 マニングリダに交易所開設 [KYLE-LITTLE 1957: 123] 中央アーネムランドの多数のアボリジ ニ, ダーウィンへ流出 (50年代) [MCKENZIE 1976: 236]	ダーウィンへ 製材所の仕事につく (53) メルウェンビへもどる (56) マニングリダへ 滑走路建設に従事
57 マニングリダ, 集落としての経営はじま る 64 アボリジニ市民権獲得 銃の使用許可 (60年代前半)	最初の妻死亡 トラックの運転技術習得
(66) ダーウィン病院での遺体の検視はじまる (遺体のダーウィン移送が義務づけられ る) アウトステーション・ムーブメント	68 アウトステーション建設のため現在地へ 69 ガッチ道
(70) 社会保障金 (失業保険金) 支給開始 72 労働党内閣成立。アボリジニ問題省をつ うじてアボリジニ社会への積極的な援助 はじまる 73 マニングリダからの道路が整備されはじ める	(70) ランプアと再婚 75 ガマディに家屋 4 戸建設 アウトステーションとして登録
76 アボリジニ土地権法制定	76 ロルガエラに軽飛行場建設 77 「店」を設ける 無線電話設置
78 バウイナンガ・アボリジニ協同組合発足 (マニングリダ) 79 アボリジニ芸術局(マニングリダ), 本格 的活動開始 80 沿岸 2 km 囲い込み	プロミスト・ワイフ, ワイマンパと結婚 この頃から木皮画製作に専念 (80) 兄死亡, 墓地をつくる 85 井戸設置

によっても、ウヌウン氏がオーストラリア社会全体とのかかわりのなかで生活してきたことの、あらましが読みとれよう。

白人社会へのあこがれ 1942年以前³⁾ジナン族の領域 [TINDALE 1974: 224 および付図] には、少なくとも2つの古い「むら」が存在した。それは領域北部のメルウェンビ Merrwenbi と、南部のガッチ Gatji である。この2つはともに現在まで存続する (図2参照)。

そのひとつメルウェンビに1930年ごろに生まれたウヌウン氏は、42年前後のころ (11歳のころか)、ガッチで成人儀礼⁴⁾をうける。割礼など身体変工をともなう儀礼をおえた彼は、その後オーエンペリを経由してダーウィンへでる。それは42年以後あまり時間のたたないところで、この地域のアボリジニが大量にダーウィンへ流出する初期のころのことであった。徒歩で1カ月を要したこの旅の持ちものは、ヤリとヤリ投げ器 (写真2) だけだったらしい。食糧は、当時各地に散在していた「むら」をたずねてえたという。旅そのものが、「むら」から「むら」をたどっておこなわれた。その

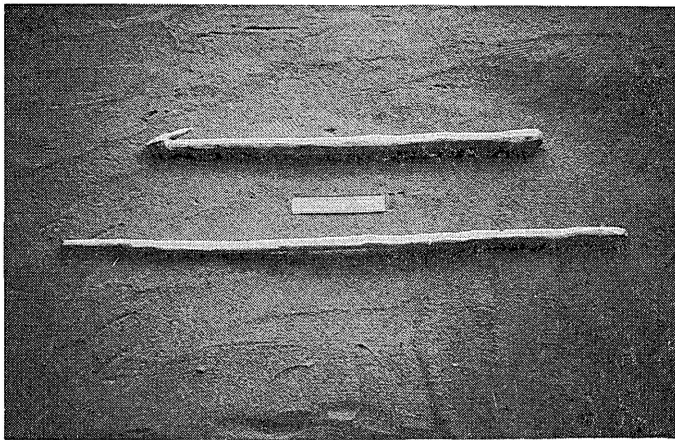


写真2 ヤリ(下)とヤリ投げ器

このヤリはおもに水鳥の狩猟に用いた。ヤリ投げ器は、使用者の脇から手首までの長さにあわせてある。素材はともにストリンギー・パーク *Eucalyptus tetradonta* の若木。

3) 1942年以前は、日本軍のアーネムランド爆撃以前を意味する。アーネムランド・アボリジニは、当時の様子をなお克明に記憶し、その一部をうたとおどりとして語りついでいる [松山 1988b: 407-435]。なお、アーネムランドは1942年から45年まで軍の管轄下におかれた [Cole 1979: 90]。

4) この儀礼は現在も厳格におこなわれる。1988年の調査時には、ガマディの子供1人を含む数人が7日間ほどかけて成人儀礼をうけた。儀礼をおえた子供(若者)は、通常、彼の親族が住む「むら」または「まち」にもどるが、身体に施された傷がいえるまでの約10日間は「むら」または「まち」周辺の林のなかに起居する。ただし、筆者はこの儀礼への参加がまだ許されていない。

間の距離が1日行程をこえる場合は、当該領域に生活する人びとがいないあいだに狩りをし、食物をえていたという。アボリジニ社会においては、当該領域の居住者の了解なしに狩猟することは、つつしむべきこととされるからである。

1カ月がかりでダーウィンに到着したウヌウン氏は、ここでいくつかの仕事につきながら、都市で生活することになる。その最初の仕事は、当時ダーウィンに駐留していたオーストラリア陸軍の食堂の下ばたらきである。彼の給与は、「2週間につき1ポンドの現金とタバコ1缶、タバコをまく紙1包み、それにマッチ1箱」であった。1年間この仕事に従事したあと、彼は空軍にうつる。ここでは隊内の清掃作業（ゴミの収集と焼却）員として2年間働くことになる。「2週間に1度、土曜日に支払われた給与は8ポンド」であった（オーストラリアの通貨は1966年にポンドからドルにきりかわる）。軍隊内の下ばたらきをしていたこの3年間、彼は軍隊の駐留地の近くに野宿する生活を送っていた。このころウヌウン氏は、ブララ Burara 族出身の最初の妻と結婚し、長男ガンダディラ Gandadila をもうける。

当時ダーウィンに駐留した軍隊には、ジナンやブララ、グナビジ Gunavidji など現在のマニングリダ管区に含まれる部族の若者だけでなく、オーエンペリの「まち」とその周辺からも、数多く働きに出ている [COLE 1975: 47]。その当時のことを、ウヌウン氏は「白人社会につよいあこがれをもっていた」と回想する。彼らがプタ Puta とよぶランプ・ゲームや、オーストラリア・ルールのフット・ボールを白人に習い、飲酒の習慣を身につけたのもこのころのことであった。

3年間の軍隊での仕事をやめた彼は、ダーウィンの南350kmの地方都市キャサリン Katherine にうつる。ここでは、牧童——かなりのアボリジニが当時この仕事に従事していた——のための料理人を1年間つとめる。その当時の体験のなかで、ウヌウン氏にとって印象ぶかかったのは、日時計で時間ををはかることであった。彼もアボリジニの牧童も、地面に立てた杭の影で、作業時間の開始と終りを白人に教えられたのである。

この仕事をへてその後ダーウィンにもどった彼は、製材所で働く（仕事の内容は明らかでない）など、白人の社会でいくつかの労働についたが、その実労働期間は数年間にすぎないとみられる。しかし、マニングリダにもどった年（1953年ごろ）から推定して、ウヌウン氏はほぼ10年ほどをダーウィンとキャサリンですごしたことになる。

この10年ほどのあいだに、彼は警察に少なくとも2度留置される。1回めはアボリジニの仲間3人とラム酒を盗んで21日間、2回めはアボリジニとの喧嘩で10日間の留置体験をもつ。このことは、50年代に大量にダーウィンへ流入したアボリジニがもた

らした混乱の一端を示すものかもしれない。しかし、この種の事件だけに限れば、その経験をもつ若者は必ずしもこの時代に特徴的ではない。現在、都市や「まち」に暮らすアボリジニの若者のあいだにも、これは一般的にみられることがらである。

「まち」の生活 この数かずの体験ののち、ウヌウン氏は交易にでむく白人の船外機つきボートで、53年ごろ妻と息子をともなってマニングリダにもどる。当時のマニングリダは、まだアボリジニと白人の交易地点にすぎなかった。そのためか彼はここにとどまらず、出生地であるメルウェンビへもどっている。そこでの3年ほどの生活のあと、「まち」の役人の勧誘もあって、56年ごろ再びマニングリダにむかう。そのころの様子を、ウヌウン氏はつぎのように語る。

「マニングリダができるといううわさが流れたころ、白人の役人がわれわれの土地にやってきた。そして「まち」へいくことをすすめ、何人かをつれていった」。

ウヌウン氏がこの勧誘に応じた当時、マニングリダでは家屋の建築がほぼおわり、軽飛行機用の滑走路の建設だけが残されていた。彼はその作業に加わり、57年に「まち」が完成するとそれを祝う儀礼的な戦闘に参加している。それ以来68年まで、ウヌウン氏は新しい「まち」マニングリダ（図3）での生活を続ける。この間、彼は生活そのものがもたらす緊張のもとにおかれることになる。その様子はこのように説明される。

「当時、マニングリダには8～9部族が混住し、人口がいまよりも多かった。そのうえペトロスニフィン（気化したガソリンを吸引すること）が流行し、それがもつて若者のあいだに争いが絶えなかった。しかも、マニングリダはもともとグナビジ族の領域であり、グナビジと他の8部族とのあいだにも、絶えず争いがあった。それにいや気がさしていたころ、グナビジとのあいだにトラブルがおこる。彼らはわれわれにむかって、それぞれの領域へもどるように主張した」。

ウヌウン氏に「まち」をでる決心をさせたのは、これらの体験だけではなかった。彼はこのころ、最初の妻を亡くしたからである。

こうして68年、ウヌウン氏は息子とともに「まち」をはなれ、ジナン族の領域にもどって、「むら」の建設に着手する。彼が38歳ごろのことである。その少しまえ、彼は「まち」でトラックの運転技術を習得する。当時「まち」には、警察署を中心に若干数のトラックが導入されていた。警察に頼みこんだ彼はくりかえしトラックに同乗し、運転の手順を観察しつつけたという。やがてそれがすべて記憶できたと思った段階で、彼が同乗したことのある特定の道路を頭の中に描きながら、手順どおりにその道を運転する自分を克明にイメージしていった。この一種のイメージ・トレーニング

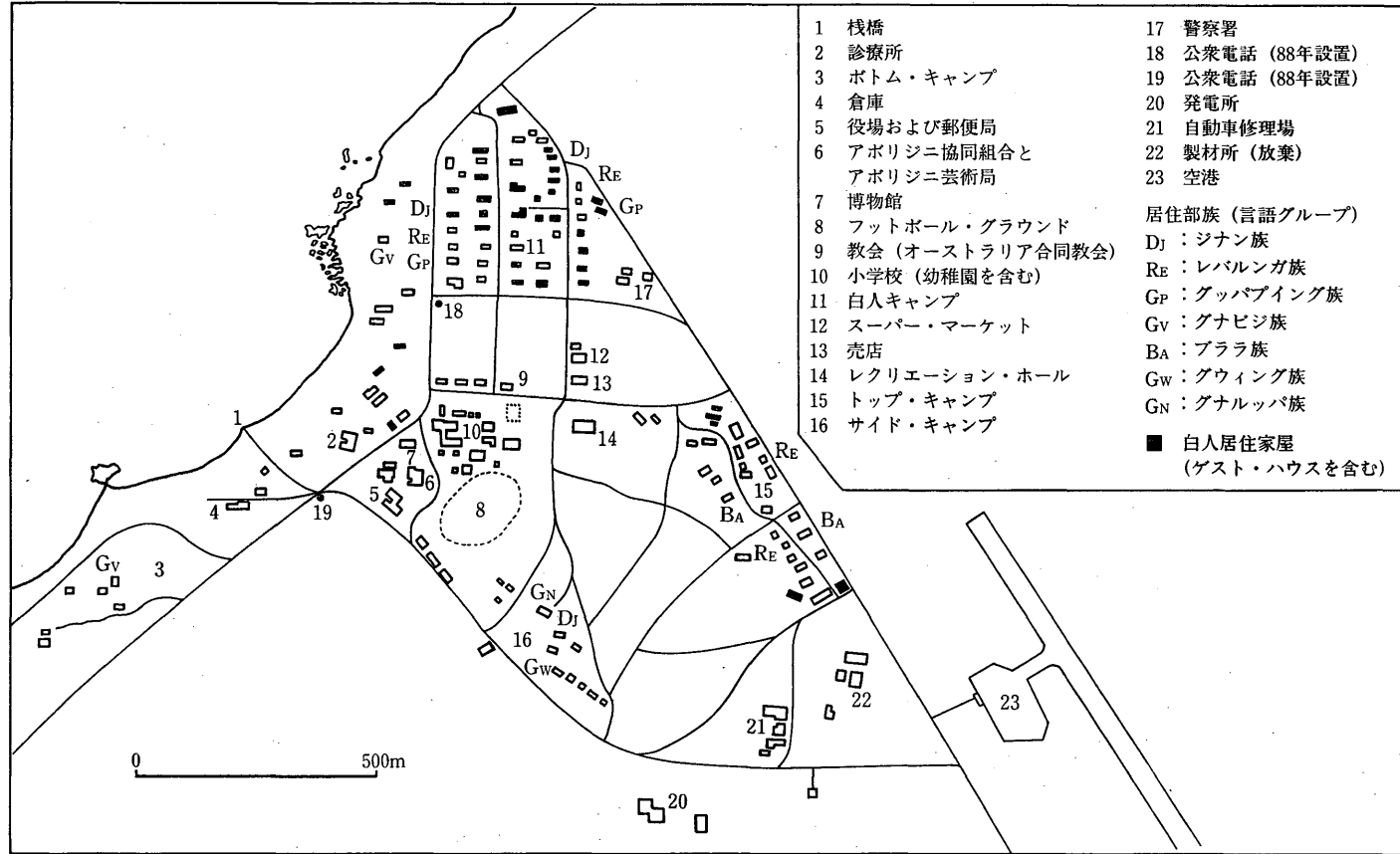


図3 マニングリダの「まち」と混住の状況 (1988年)

ともいうべき過程を経て運転できると判断したとき、はじめてその道を走ったのだという。

その技術の習得の方法とプロセスは、当時に比べてトラックが普及した現在においてもまったくかわらない。ウヌウン氏の息子ガンダディラもまた、この方法によって父から運転技術を習得しているからである。

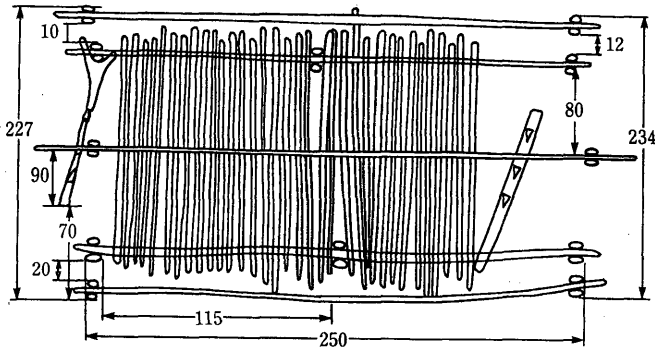
「むら」の建設 マニングリダの「まち」の役場をつうじて、アウトステーション建設のためにポートを貸与された68年、彼はマニングリダをでて母の故地である現在地で「むら」建設の作業をはじめ。それは鉄製オノとノコギリで、ユーカリ属が優占する森林を伐採することからはじめられた。この作業にはウヌウン氏のほか、彼と親族関係にあるジナン族2人とブララ族1人のあわせて4人の成人男子が従事する。

翌69年には、26 km はなれた隣接する古い「むら」ガッチへ徒歩でいくための道を、1年がかりで開設する。その後70年前後のころ、ウヌウン氏は、夫に死別したブララ族の女性ランププ Lanpupu と再婚する。そしてその数年後、アボリジニ問題省(DAA)がアボリジニ社会への積極的な援助を開始した直後の74年から75年にかけて、役場をつうじてトタンが支給される。これをうけてウヌウン氏は、それまでの高床式の樹皮家屋(図4)にかえて、新しいタイプのトタンの家屋を建築する。このとき建築されたトタンの家屋は、ウヌウン氏をはじめ、彼の兄(80年ごろガマディで死亡した)と彼の母方の交叉イトコであるナラピア Narapya 氏、およびウヌウン氏の息子ガンダディラの小屋の4戸である。

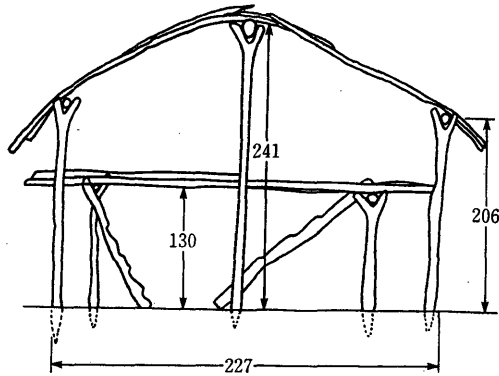
従来の樹皮にかえて高床の部分をとタンでおおったような構造のこれらの家屋は、日中の気温が摂氏40度をこえる乾季(7~11月)には使用できず、彼らは屋外にカヤをつって眠ることとなった。しかし、風雨をしのぐ効果がたかいこのトタンの家屋は、雨季には重宝される。たとえばウヌウン氏の場合(図5)、家屋の東側にある高さ75 cmの床は夫婦が、北側の高さ210 cmの床は息子のガンダディラが使用していた。彼の近縁の親族が滞在するときには、それらの人びとは西側の床か土間に眠った。たき火は、雨季の蚊やりと調理のためのものである(乾季には調理も屋外です)。

こうした家屋が建設され、「むら」のかたちをととのえた75年、ガマディはアウトステーションとしてマニングリダの役場に登録される。

翌76年、ウヌウン氏らは再びマニングリダの役場をとおして、トラクターの貸与をうける。「むら」の南5 kmのロールガエラ Rolgaera に、急病人を「まち」に空輸するための、軽飛行機用の滑走路を建設するためであった。立木を伐採しその根株をトラクターでほりおこすなど、この作業には1年を要した。



平面図



立面図

図4 樹皮家屋の見取り図(単位 cm)
現国立民族学博物館所蔵資料(標本番号H0123979)

滑走路が完成すると、翌年(77年)、ウヌウン氏は「むら」にショップ Shop のための独立の家屋を設ける。このショップは、マニングリダの「まち」のマーケット(開発協会 Maningrida Progressive Association: MPA が経営・管理する)から運ばれる小麦粉や缶詰、砂糖や紅茶といったマーケット・フーズと散弾銃の弾丸などを一時的に貯え、必要に応じて販売する「店」であった(表4には、1984年の販売品目と価格をあげておいた。77年ごろには、これらのうちパンやベーキングパウダーなどを除いて、ほぼ同じ品物が販売されたと思われる)。

当時、これらの品物の供給地は、ブライス Blyth 川が利用できるガマディに限られていた。そのため、隣接の古い「むら」ガッチやすでに建設をはじめていたウレジェ

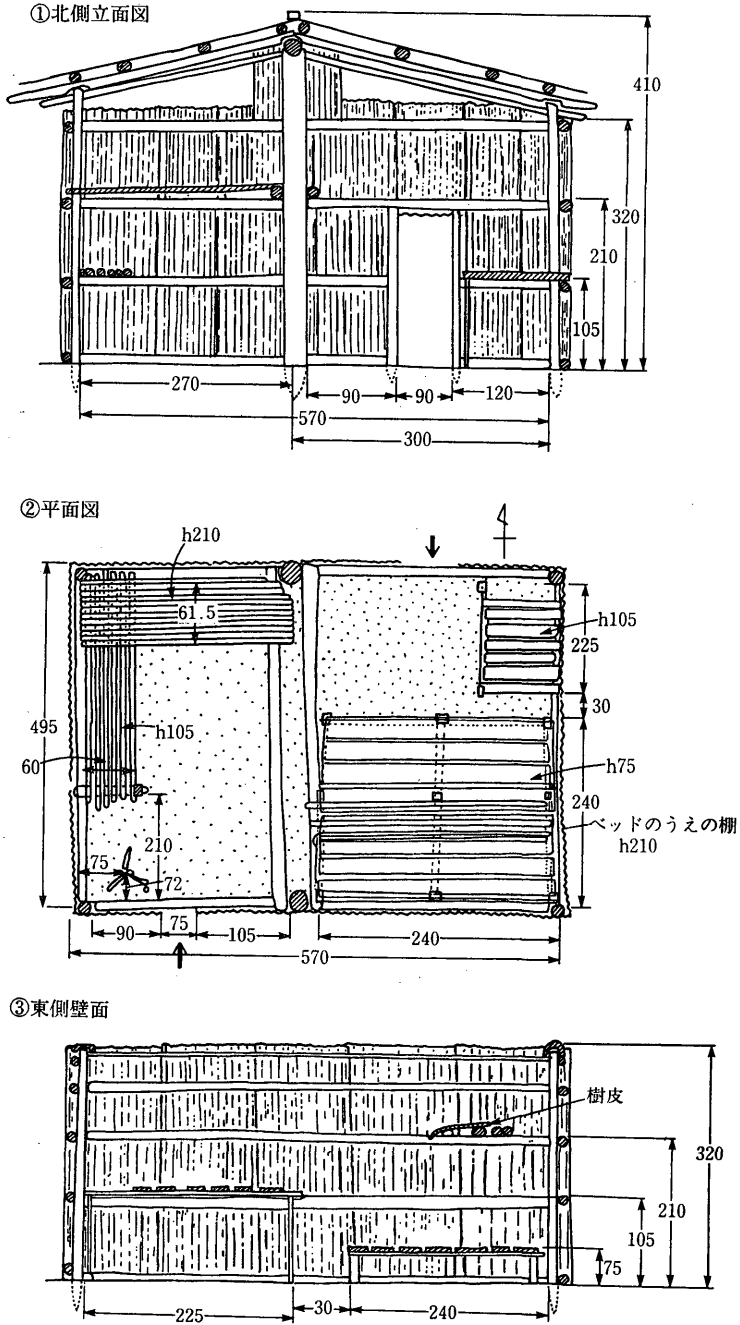


図5 ウヌウン氏のトタン家屋の見取り図(単位 cm)

表4 「店」で販売された品物 (1984年)
単位ドル (1ドルは約100円)

砂糖 (1 kg 入り)	3.00
小麦粉 (1 kg 入り)	1.50
紅茶 (1 箱)	1.50
粉ミルク (1 缶)	7.50
ビスケット (1 箱)	2.50
塩 (1 kg 入り)	1.50
マッチ (1 カートン)	1.50
コンビーフの缶詰 (1 缶)	2.00
肉と野菜の缶詰 A (1 缶)	3.00
肉と野菜の缶詰 B (1 缶)	2.00
肉入りパイの缶詰 (1 缶)	3.50
ベーキング・パウダー (1 缶)	2.00
紙巻きタバコ A (1 缶)	3.50
紙巻きタバコ B (1 缶)	3.00
タバコの巻き紙 (1 包)	0.20
ソフト・ドリンク各種 (1 缶)	0.70
パン (1 ローフ)	2.50
石鹸 (3 個)	1.50
洗濯洗剤 A (1 箱)	4.00
洗濯洗剤 B (1 箱)	1.50
散弾銃の弾丸 (1 箱)	16.00

A・B は同一品目に2種類の製品があることを示す (資料は「店」の掲示による)。

だ彼は、傷がいたあともガマディでの生活をのぞんだという。しかし、ウヌウン氏のつよいすすめで、スティール氏は、父の故地である現在地にあらたな「むら」ウレジェを建設した。

さて、ガマディに「店」を設けたこの年 (77年)、ウヌウン氏はマニングリダの役場をとおして、太陽電池と自動車の蓄電池を電源にする無線電話を購入する。この当時、ガマディ周辺には無線電話がまだまったく設置されていなかった。そのため、周辺の「むら」びとはマニングリダの「まち」との連絡⁵⁾のため、しばしばガマディをたずねることになった。この無線電話と「店」の存在によって、ガマディはこの地域の小さなローカル・センターの機能をになうことになる。そのことがウヌウン氏には

Wredje などは、ガマディの「店」を経由してこれらの品物を入手していた。さらに、このころすでに支給されていた失業保険金 (白人的な意味で職をもたないアポリジニはすべて失業者とみなされている) などの社会保障金も、ガマディを経由して周辺の「むら」に配られたらしい。

ところで、ガマディの北 10 km にある「むら」ウレジェの建設にも、ウヌウン氏はふかくかかわっていた。現在、ウレジェのリーダーであるスティール Steal 氏 (ブララ族) は、ジマルダ Djimarda 「むら」(図2参照) に滞在していたころ、アポリジニ間の争いでシャベルノーズ (鉄製のばほひろなヤジリをもつ戦闘・狩猟用のヤリ) で下腹部を射ぬかれ、重傷を負った。ウヌウン氏の世話でガマディに逃げこん

5) 1984年10月5日、15日の合計8時間に筆者が記録したガマディ・マニングリダ間の1時間当たり平均通話回数は2.1回であった。通話内容はマニングリダ発では、食糧供給トラックが発したこと、「まち」に住む親族の動静などである。またガマディからの発信では、狩りの獲物の種類や数、獲物の一部を通りがかったトラックにたくして送ったことなどである。一般に日常のこまごましたことを伝えあうのに、無線電話が使用される。この無線電話の価格は、本体と太陽電池などを含めて、1セット2,000ドルである (82年10月現在)。

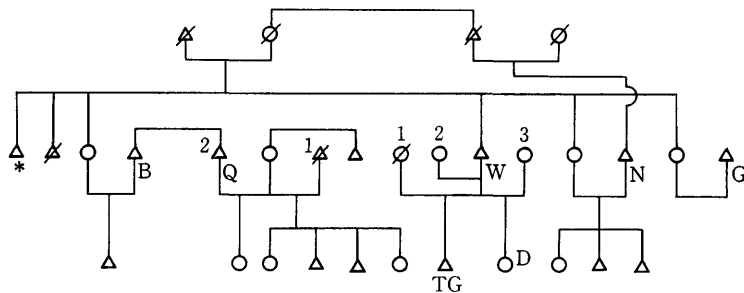
自慢であったらしい。

こうした経緯の後、77年に船外機付きのボートが貸与されて、ガマディはほぼ現在の「むら」の施設とかたちをととのえる。このころ、マニングリダをはじめラマンガニンなど「まち」に生活してきた人びとが、比較的近縁の親族をたよってガマディに集まりはじめる。それはブルンブルン **BulunBulun** 氏（76年にこの「むら」にうつり住んだ。詳しくはブルンブルン氏の生活史を参照）の兄弟であるゲェルゲェル **Girr-Girr** 氏とその家族、ウヌウン氏の妹を妻にもつガジャオウラ **Gadjaowra** 氏夫婦、それにウヌウン氏の母方の交叉イトコであるナラピア氏の家族などであった（図6）。このころガマディの居住者は22人ともっとも多くなる。

ナラピア氏を除いてトタンの家屋をもたなかった彼らは、容易に建築できる従来の樹皮家屋にそれぞれ生活した。その家屋は、彼らが再び「まち」にでる83年の乾季までガマディに存在した（写真3，図7）。

この83年のできごとについて、ウヌウン氏は「彼らがなぜここをでたのかはしらん。聞きもしなかった。だがその後もとききたずねてきて、一週間か10日はここに暮らしていく」と語る。それよりまえ80年ごろ、ウヌウン氏の兄がガマディで病死する。兄の遺体は、病院での検視のため、マニングリダを経由して飛行機でダーウィンに移送された。

この病院での検視は、死因の確認——病死かトラックなどの事故によるものか変死かの確認——をおもな目的として66年ごろにはじまる。それに対して、当時のこの地



- B：ブルンブルン **BulunBulun** N：ナラピア **Narapya**
 Q：ゲェルゲェル **GirrGirr** G：ガジャオウラ **Gadjaowra**
 W：ウヌウン **WunuWun** D：ジュンジュロ **DjunDjuro** (80年ごろ誕生)
 TG：ガンダディラ **Gandadila** □ 婚姻関係を示す
 1 2 結婚の順序を示す *メルウェンビ在住

図6 ガマディの居住者（1982年当時）

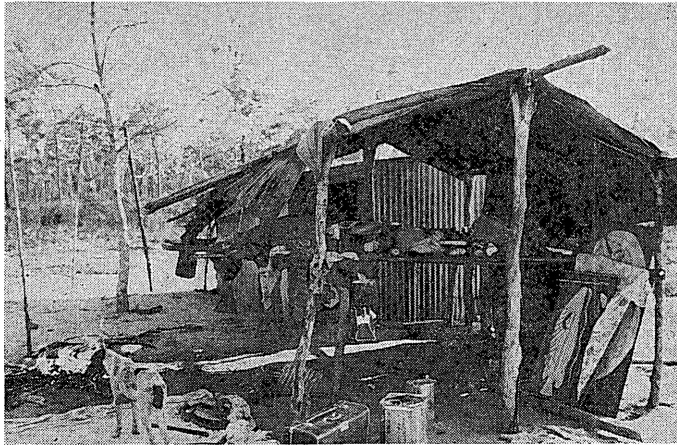


写真3 高床式の樹皮家屋

ブルンプルン氏がトタンの家屋とともに1983年まで併用していたもの。
屋根には *Eucalyptus tetradonta* の樹皮が用いられる。

域のアボリジニは異議をとらえた。その理由をウヌウン氏はつぎのようにいう。

「病院での検視は好ましいことではない。彼らは死体とともに死者の血も汗もすべてをもっていってしまうからだ。それはここにあるべきなのだ。死体が異臭をはなしても、それはたいしたことではない。わしらはいまも死者と死者のスピリットのめんどろをみたいと思っている。それはわしがアボリジニだからだ(ジナン族は、死者を精霊の世界に導くためには、死者の血と汗が欠かせないと考える。その血と汗がフクロウをなかだちに精霊ムンヤリル Munyaril にわたされることによって、死者が精霊の世界に導かれると信じている)。だから、検視がはじまったとき、わしらは死体かわりに水牛肉を柩にいれて送った。しかしまでは、わしらは病院や警察と議論したくない」。

ウヌウン氏は兄の遺体の返却をまって、葬送の儀礼をおこなった⁶⁾。「むら」の北東隅に墓地がつくられたのは、このときのこらしい。83年に一部の人が「むら」

6) 筆者は1982年にジナン族に領域を接するブララ族の葬送儀礼への参加が許されたもの [松山 1986]、遺体の処理についての観察などは許されなかった。

1930年代のトムソン Thomson の観察によると、遺体はつぎのように処理される。まず死者の FZS, ZS, MB などが遺体にクランの模様を描き、ついで死者の頭髪やあごひげをぬきとる。この頭髪は死者の MF や MBS などに送られて糸にあまれたあと、死者の近縁の親族、とくに成人した息子があればその息子にかえられる。

遺体はボディーパーペインティングしたその日か数日後に埋葬する。その後1~2カ月して遺体をほりだし、四肢、頭骨の順で骨をとりはずして洗ったあと樹皮につつま。これを死者のクランの模様を描いた円筒形の柩に入れる。このときに、死者が生前使用していた小屋やヤリなどの所有物をもやし、死のけがれを浄める。骨を入れた円筒形の柩は自然に腐食するまで、キャンプにたてておかれる [PETERSON 1976: 97-108]。

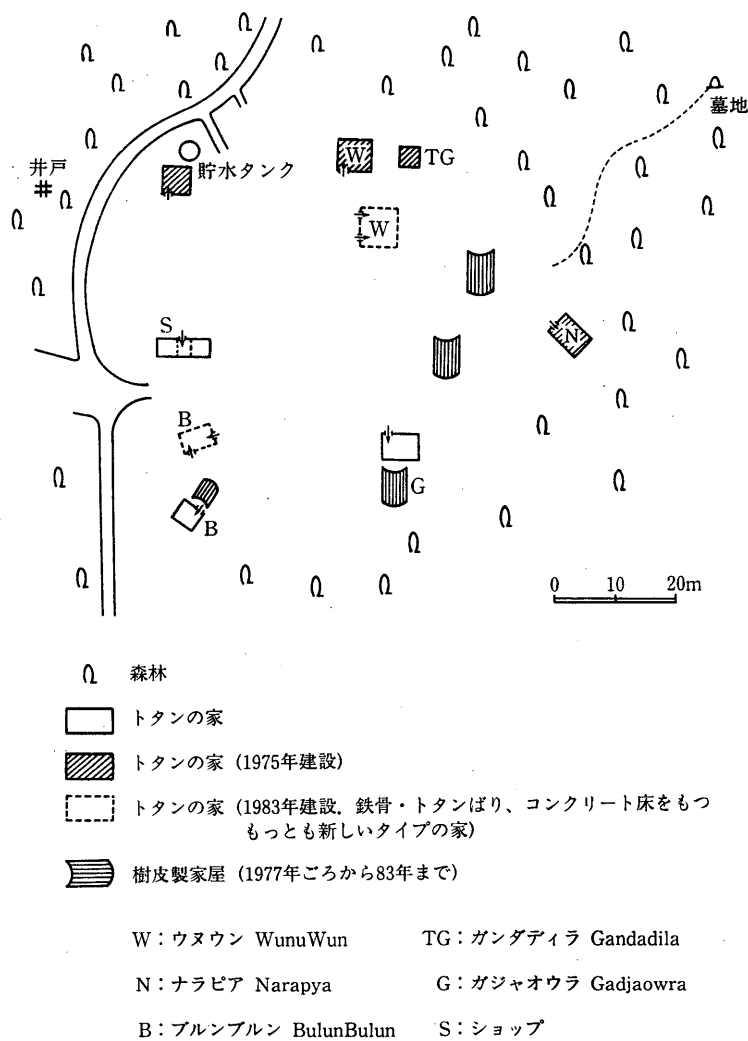


図7 ガマディの家屋配置

をでたのは、ウヌウン氏の兄の死がひとつの理由だったと考えられる。かつては頻繁に居住地をかえてきた彼らにとって [HEPPELL 1979: 51-56], 近い親族の死はガマディを離れるに十分な契機となったであろう。

そして86年、長いあいだ懸案であった井戸が、アウトステーションの援助機関として78年に役場から独立したバウイナンガ・アボリジニ協同組合 (BAC) によって設置される。風車で揚水するこの井戸の完成で、現在あるガマディ「むら」の施設がすべてととのうこととなった。

このガマディのリーダーであるウヌウン氏は、「むら」建設の過程で、キリスト教

徒になるようくりかえし白人の宣教師に勧誘をうける（会派は不明だが、マニングリダに教会をもつ合同教会 Uniting Church in Australia か、アボリジニのあいだに現在ひろく普及している純福音教会連合 Full Gospel Church in Australia のいずれかだと思われる）。そのつど彼は、「わしはラムもビールも飲む。喧嘩もする。だからキリスト教徒にはならん」といって断ってきたという。彼はいまもキリスト教には無関心である。

そのウヌウン氏は、著名な木皮画家である。成人儀礼をおえた直後「白人社会にここがれていた」当時、彼は木皮画（乾燥したユーカリ属の樹木の樹皮に、顔料を用いて彼らの神話やドリーミング（トーテム）をモチーフにしたアーネムランド・アボリジニに特徴的な絵画）や彫刻をはじめ各種の儀礼など、彼らの文化にはあまり関心がなかったらしい。彼が木皮画の描き方とそのモチーフの背後にある神話や儀礼について、父の教えに本格的に関心をもつようになったのは、ダーウィンでの都市生活のあとだったらしい。それはおそらく、ウヌウン氏がメルウェンビに滞在していた20歳代前半のことであったとみられる。

そのせいか彼は「わしは31の神話しかしらん。ほかの老人はもっと知っている。彼らはわしをムチうつかもしれん」と語る。神話に生活の規範を求めてきた彼らの社会において、これはウヌウン氏が規範のすべてを充分に知らないと思っていることを意味するのであろう。そのことによって彼は、慣習にしたがえば身体的な制裁を加えられるはずであるというのである。その彼は48歳のころ（78年）、慣習にしたがってプロミスト・ワイフ⁸⁾というかたちで、ブララ族の女性ワイマンパ Wymarpa を2人めの妻にむかえ、80年ごろ彼にとっての第2子ジュンジュロ Djundjuro をもうけている。

現在、ウヌウン氏が好んで木皮画に描くのは、祖先祭祀でもあり子供の誕生を祝うためでもある「星まつり」の儀礼 [松山 1988b: 407-435] や、彼のドリーミング

7) ウヌウン氏が「むら」とどまったのには、トタンの家屋をはじめ、墓地など「むら」の施設がすでにかなりの程度とどまっていたことがある。

彼らがトタンの家屋に暮らしはじめてからは、人が死亡してもその死者の家屋をもやすこともとり壊すこともしない。そのかわり家屋の外壁を赤の顔料（オーカー）で描いた1本の線で囲ったあと（赤オーカーには死者の霊をおいはらう力があると信じられている）、一定の期間、使用せずに放置する。期間をすぎると一種の浄めの儀礼をおこなってから、死者の親族らがそれを使用する。このことはトタンの家屋が彼らにとって永続的なものと認識されていることを示している。その家屋をもっていたウヌウン氏は、「むら」にふみとどまったとみられる（「むら」を出た人びとは、ガジャオウラ氏を除いてすべてが樹皮家屋に生活していた）。

これとともに、兄の遺体を埋葬した墓地のあるガマディは、ウヌウン氏にとって、彼の生誕地より以上に、土地との結びつきを深めていたとみられる。この2つが、彼をガマディにふみとどまらせたおもな理由であろう。

である「笠」や「ヤムイモ」, 「チョウ」や「トンボ」のモチーフである(写真4)。その精緻な画法の木皮画はたかい評価をうけ、アボリジニ芸術振興協議会(Aboriginal Arts Board)が管轄するアボリジニ芸術局(Aboriginal Arts and Crafts Centre, マニングリダではアボリジニ協同組合 BAC に併設される)をつうじて、最近の数年間に数回にわたって生活資金の援助をえただけでなく、木皮画を販売してえた収益は、85年9月からの1年間を例にとると5,000ドル(邦貨に換算して50万円強)にたっている(この間に製作した木皮画は11枚)。

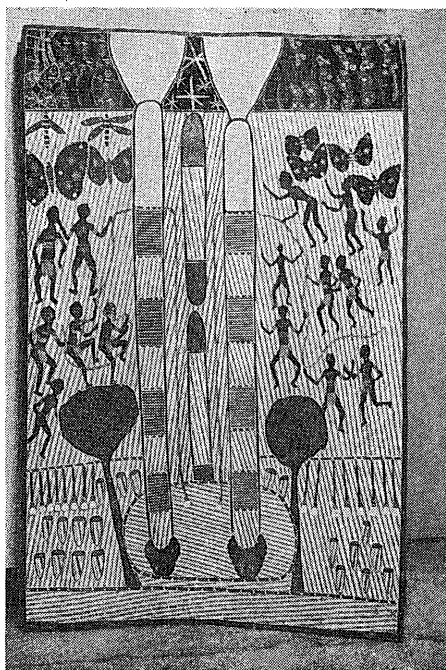


写真4 ウヌウン氏の木皮画「星まつり」

祖先の精霊が宿る2本の柱マラジリ Maradjiri と踊る人びとを中央に、上部には彼のドリーミング(トーテム)であるチョウやトンボが、下部にはユーカリの木と儀礼用の籠が描かれる。中央2本の棒は、彼らの楽器のひとつ拍子木である。国立民族学博物館所蔵資料 標本番号 H 140381, 写真5は同じく H101957



写真5 ブルンブルン氏の木皮画

彼が属するクランの故地(カントリー)を描いたもの。中央と上部の2つの円は神聖な「クランの泉」をあらわす。この泉には彼のドリーミング(トーテム)であるカササギガン *Anseranas semipalmata* やクビナガガメ *Chelodina rugosa* などが生棲し、彼の祖先の精霊が生活する。そこは死した後ブルンブルン氏の精霊が旅だつ世界でもある。

- 8) プロミスト・ワイフは、EGOのFZDDのなかから選ばれる。その選択はEGOの母の姉妹とその配偶者によっておこなわれる。この決定がなされると、夫となるべき男性はプロミスト・ワイフになるべき女性の出生から結婚後にいたるまで、彼女と彼女の両親に経済的な援助をつづけることが義務づけられる。この義務は、プロミスト・ワイフの両親が援助の解除を申し出るか、もしくは死亡するまで課される。

(3) ブルンブルン氏の生活史

1976年にガマディにうつり住んだブルンブルン氏は、都市での生活体験をもたず、狩猟による食糧獲得や儀礼への頻繁な参加によって、この「むら」を経済的にも社会的にも支えてきた。いまガマディ最大の保有財の持ちぬしであるその彼が語る生活体験（表5）は、ウヌウン氏とは別のアーネムランド・アボリジニの生活の変化を明らかにするであろう。その生活史の時期区分がウヌウン氏とことなるのは、すでに述べた理由による。

結婚まで 1953年ごろアラフラ湿地 Arafura Swamp の東縁、ジンバ Djinba 族の本来の領域に生れたブルンブルン氏（氏の名前は彼がもつ複数のドリーミングのひとつ、ある種のクモを意味する）は、成人儀礼をうけるまえの60年前後のころ、家族とともにミリングンビの「まち」にうつる。この移動は、役人の勧誘にもとづくものではなかった（ミリングンビはメソジスト教会 Methodist Church によって1923年に設立された）。それはブルンブルン氏の父が、彼を学校にかよわせて英語を習わせようとしたためであったという。

ミリングンビの「まち」にうつった彼は、しばらくのあいだ学校へかよったり、湿地に生育する野生稲を収穫してダーウィンへ発送する仕事についたりする。このころ彼は成人儀礼をおえたものとみられる。その後あいだをおかずに、彼は木皮画の技法を父に習ったらしい。現在の彼は、ウヌウン氏と同様に屈指の木皮画家で、そのモチーフには彼のドリーミングである「クビナガガメ」や「カササギガン」が多く登場する（写真5）。

ブルンブルン氏は木皮画の技法を習得するかたわら、当時この「まち」に開設されていた農園（フィジー系の人々が管理していた）で、バナナ、ココナッツ、ピーナッツ、カボチャなどを栽培する農園労働者となり、トラクターの運転技術を身につける。その技術の習得方法は、すでに述べたウヌウン氏とかわらない。

こうして彼ははやくから「まち」に暮らしたが、キリスト教には無関心であった。その彼の一家が、このミリングンビにいつまで滞在したか明らかでない。彼らはその後、グライド Glyde 川下流の「まち」ナンガララ Nangalala へうつる。ここでブルンブルン氏は、食糧供給用船の棧橋づくりにしたがう。この当時からアーネムランド西部の「まち」には、2週間に1度の割でダーウィンからの食糧供給船が就航していたからである。

棧橋が完成すると、彼はこの「まち」に隣接していた牧場のアボリジニ労働者を、

表5 ブルンブルン BulunBulun 氏の生活体験 ()は推定年を示す

歴史的な状況	個人的体験
1880-82 パストラル・ブーム アーネムランド, 牧畜業にリースされる 1920 アーネムランド西部に保護区設定 1923 ミリングンビ・ミッション開設	
42 ダーウィン爆撃 N.T 政府アリスへ (45.9 まで) オーエンペリのアボリジニ, 大量にダー ウィンの陸軍が雇用 [COLE 1957: 47]	
47 マニングリダに交易所開設 [KYLE-LITTLE 1957: 123] 中央アーネムランドの多数のアボリジ ニ, ダーウィンへ流出 (50年代) [MCKENZIE 1976: 236]	1953 アラフラ湿地東縁に生れる (60) ミリングンビへ移住
57 マニングリダ, 集落としての経営はじま る	成人儀礼, 木皮画の技法を習得 トラクターの運転技術習得 ナンガラーラへ移住
64 アボリジニ市民権獲得 銃の使用許可 (60年代前半)	父, 死亡 (63) マニングリダへ移る
(66) ダーウィン病院での遺体の検視はじまる (遺体のダーウィン移送が義務づけられ る)	製材所の仕事につく 牧童の仕事につく
アウトステーション・ムーブメント	(68) リンジャルラと結婚 工芸品買い上げの補助につく
(70) 社会保障金 (失業保険金) 支給開始	(70) アウトステーションへの食糧供給の仕事 の補助につく
72 労働党内閣成立, アボリジニ問題省をつ うじてアボリジニ社会への積極的な援助 はじまる	
73 マニングリダからの道路が整備されはじ める	モルゴラム建設に参加 プロミスト・ワイフをめぐる争いに破れ る
76 アボリジニ土地権法制定	76 ガマディに移る この頃から木皮画製作に専念
78 バウインガ・アボリジニ協同組合発足 (マニングリダ)	
79 アボリジニ芸術局 (マニングリダ), 本 格的活動開始	
80 沿岸 2 km 囲い込み	
	86 故地にアウトステーション建設を計画

トラクターで送迎する仕事をえる。この仕事に従事していた60年代前半と推定されるころ、彼は父を亡くしている。この父の死を契機に、ミリンギンビで生れた弟のゲェルゲェル氏とともに、彼はナンガラーラをはなれ、建設まもないマニングリダにうつった。

結婚後 ここでは、ユーカリ属の樹木を伐採・製材し、ダーウィンへ搬出していた製材所の仕事をへて、しばらく牧童として働くことになる。当時のマニングリダには、いまの警察署のすぐ背後に（図3参照）、牛の移送にそなえたヤードがあった。このヤードは、オーエンペリ方面からローパー・リバー方面へ移送する牧牛を一時的に管理する施設で、彼はそこで朝ゲートをあけ、夕方には牧牛をヤードに入れる仕事についた。このころ、ブルンブルン氏はウヌウン氏の姉リンジャルラ Lindjarla と結婚する（ブルンブルン氏15歳ごろのことか）。

その後ほどなくして牧童をやめた彼は、やがてマニングリダの白人に見いだされ、アボリジニが製作する木皮画や彫刻、カゴなどを購入し都市へ販売する仕事の補助についた。しかし、これも長くつづかなかった。彼の親族関係にある人びとがその作品を高く購入するようせまるなど、彼らとのあいだにいさかいが絶えなかったからだという。

70年代になると、マニングリダの「まち」の周辺にはいくつかの「むら」が建設されはじめ、それらと「まち」を結ぶ道路が整備されてくる。このころ「まち」のマーケット（開発協会 MPA が管理・運営する）は、トラックによる各「むら」への、小麦粉や缶詰などのマーケット・フーズの供給を開始する。ブルンブルン氏は、この食糧供給トラックで食糧品を販売する仕事に、白人とともにたずさわることになる。この当時、ガマディはまだ建設途上にあつた。ブルンブルン氏が食糧その他を運んだのは、マニングリダ東部のブララ族の「むら」コパンガ Kopanga（図2参照）をはじめ、南部のレンバルンガ族やグウィング Gunwingu 族が居住する「むら」であつた（73年当時、「むら」の数は5つとも記録されている [BORSBOOM 1978: 1-5]）。

「マニングリダには長いあいだ暮らしていて、いろんな仕事をした」という彼は、トラックの運転技術を習得した後、ジンバ族の「むら」ムルゴラム Murrigolam の建設に参加する。しかし、ムルゴラムでは役場をつうじて貸与されたトラックをめぐる争いが絶えなかつた。それぞれの人がそれぞれの目的のために、トラックをうばいあうことがつづき、ブルンブルン氏もこの争いにまきこまれる。そのうえ彼は、このころプロミスト・ワイフをめぐる争いに破れる。

この争いは、彼が慣習にしたがって、プロミスト・ワイフとなつた女性とその家族

に経済的な援助をしてきたにもかかわらず、彼女は別の男性（彼らの年齢段階にしたがって成人にたった男性で、当時のブルンブルン氏より年長で社会的な地位がたかかった）と結婚したことにはじまる。その詳しい経緯は語られなかったが、ともかく彼はその女性を妻にむかえることができなかった。

そのためブルンブルン氏は、さきにマニングリダで結婚した妻のリンジャルラとともに、ムルゴラムを逃げだし、妻方（ガマディ）に居住することを選んだのだという。それはウヌウン氏が軽飛行機用の滑走路を建設していた76年のことである。

ガマディにうつったブルンブルン氏は、散弾銃とライフルを購入し、食糧獲得のための狩猟に頻繁にたずさわる（アーネムランドでは、60年代前半に銃の使用が許可された）。その獲物が「むら」に滞在する成員に配分される。その一方で、彼は木皮画の製作に専念しはじめ、79年から本格的な活動をはじめたマニングリダのアボリジニ芸術局から数回にわたる生活資金の援助をうけるとともに、大都市での展覧会にしばしばでかけるようになる。

しかし、ブルンブルン氏がガマディにうつって10年、87年になると彼はつぎのように語る。

「マニングリダに7～8年、ガマディに10年ほど暮らした。長いあいだわたしの故地（アラフラ湿地の東縁）をたずねていない。そこに「むら」をつくり、兄弟姉妹の家族（ゲェルゲェル氏とその家族など）が集まって暮らしたい」。

ジンバ族であるブルンブルン氏は、ジナン族の領域の「むら」ガマディに暮らしてきたからである。ブルンブルン氏のこの願望は、アボリジニが可能な限り彼の故地で生活し、そこで、またはその近くで死ぬことを熱望するという、彼らに固有の故地への愛着 [PETERSON 1975: 60-63] のあらわれとみられる。この故地への愛着は、故地は現実の世界であると同時に、祖先の精霊が暮らす世界でもあるという、彼らの神話にもとづいている。

3. 生活史の分析

時間の経過に沿って一応の記録ができた2つの生活史を、生活の変化に焦点をあてて検討してみると、いくつかの注目すべきことがらが明らかになる。そのひとつは、アーネムランドに特徴的な絵画である木皮画を、この2人がさかんに製作する時期である。ウヌウン、ブルンブルン両氏はともに成人儀礼の後に父からその手ほどきを受けるが、本格的な製作は彼らがガマディでの生活を開始した1970年代後半からである

らしいということである。

ジナン族の本来の領域に「むら」を建設し、食糧の5割を狩猟動物に、残りをマーケット・フーズに依存する生活 [松山 1988a: 613-646] をはじめた彼らにとって、生活の規範であるクランの神話 [BERNDT 1984: 122] や個々人のドリーミング(トーテム)を描いた木皮画の製作は、自らのアイデンティティを確認する手段としての重要な意味が与えられはじめる。なぜならば、彼らの思想によると、男性が継承する父系クランの神話やドリーミングを描いた木皮画のモチーフとその意味は、遠い祖先の時代から時をこえて不変である。しかも、それを描くことと描かれた木皮画のストーリーを語ることは、ある年齢段階にたった父系クランの男性のメンバーにのみ許された行為だからである [MORPHY 1978: 208-219]。

さらにマニングリダの「まち」のアボリジニ芸術局 (Aboriginal Arts and Crafts Centre) をつうじて、アボリジニ芸術振興協議会 (Aboriginal Arts Board) が整備した販路をつかった木皮画の販売は、白人社会に対する自民族文化(白人社会からはアーネムランド・アボリジニとして一括される文化)が存在することの主張を可能にする。そればかりでなく、木皮画の製作と販売は、彼らが貨幣経済にあらたに対応することをも可能にするものとなった。それは、現在の彼らにとってもっとも重要な市場指向型の経済活動となっている [ALTMAN 1982: 14-17, 1987: 47-57]。

この木皮画の製作は、彼らがガマディに居住する以前にもおこなわれたであろう。しかし、その機会はきわめて稀ではなかったかと思われる。たとえばウヌウン氏の場合、成人儀礼につづく青年期を「白人社会にあこがれて」都市ですごしたあと、アーネムランドではアウトステーションの建設に従事する。彼が木皮画製作の機会をもてたのは、おそらくメルウェンピとマニングリダに滞在した十数年ほどのあいだであろう。しかし、メルウェンピでは父の教えにようやく本格的な関心をいただいた時期であり、彼がうつり住んだ当時のマニングリダは、異部族の混住のなかで生活すること自体に緊張を強いられ、長老がもっていた権威も無視される状況にあった。このころのマニングリダでは、彼らの文化がもった価値がほとんど意味をうしないかけていた。

さらにウヌウン氏の生活史をブルンブルン氏と対比してみると、アウトステーションの建設などをとおして、この2人が自らの文化へのこだわりをみせはじめるのは、20歳代後半から30歳代前半の年齢段階に到達してかららしいことがわかる(表3・5参照)。こうした精神的な状況を想定すると、ガマディでの生活をはじめ以前には、木皮画をほとんど製作していなかったと思われる。

木皮画の製作と販売は、むしろ70年代後半のマニングリダにおけるアボリジニ芸術

局の設置と、アウトステーション運動という歴史的な状況のなかで、加速度的に展開してきたのではないかと考えられるのである。

生活史に見い出される注目すべき事実のふたつめは、現在、彼らが保有する生活財と生活経験とのかかわりである。

すでに述べたように、都市での生活体験をもたないブルンブルン氏は、いまガマディ最大の保有財の持ちぬしである。その彼が近年になって購入したものには、67品目130点をこえる雑多ないわゆる白人的な財がある(表6)。そのなかには、狩猟用の散弾銃やライフル、洗濯洗剤、展覧会のための大都市への旅行用トランク(ふだんは衣類が入られる)とズック靴をはじめ、冷蔵庫のようにとりあえぬ用途をもたないものから⁹⁾、儀礼でうたわれた「うた」を自ら録音し聴くためのラジオ・カセット・デッキ、テレビとビデオ・デッキのセットにいたるまでが含まれる。このテレビとビデオ・デッキは、現在ガマディの人びとに最大の娯楽をもたらしている。彼らはほとんど毎日、日没と同時に屋外にもちだされたテレビに集まり、ビデオ映画(ナレーションは英語)を観賞している¹⁰⁾。電源は、ガソリンを燃料にする小型の発電器である。

これら多数の保有財のうち、冷蔵庫やテレビとビデオ・デッキのセット、扇風機などの耐久消費財は、86年に購入された。その購入資金の大部分は、木皮画を販売してえた収入である。この時期にあたる85年からの1年間に、ブルンブルン氏がマニングリダのアボリジニ芸術局をつうじて販売した木皮画は15枚、その売却代金は5,000ドル(邦貨に換算して約50万円)にたつする。

このほか現在のブルンブルン氏の現金収入には、マニングリダのパウイナガ・アボリジニ協同組合(BAC)をつうじて、2週間に1度支給される失業保険金がある。その額は妻のリンジャラとあわせて、年間8,700ドル(87万円)ほどになる(ただし、アボリジニ芸術局をつうじて生活資金の援助を受けているあいだは、失業保険の給付が停止される。したがって両者は、ほぼ相殺されると考えてよい。ウヌン氏の場合も同様である)。その大部分はマーケット・フーズの購入にあてられるが、いくばくかの残金と木皮画の収益が数多くの財の保有を可能にしているのである。

一方、都市生活の経験をもち、ブルンブルン氏と同様に著名な木皮画家であるウヌン氏は、木皮画から年間5,200ドル(邦貨で約52万円)の現金収入をえている(85年

9) ガマディでは、野生獣の肉を保存する行為はまったくない。たとえば、水牛を捕獲した場合でも、「むら」成員が必要な量を切りとったあとの大部分は、その場に放置する。

10) 彼らが好んで観るのは、ジャッキー・チェンやブルース・リーが主演するカンフー映画をはじめ、「ボクサー」や「ランボー」、ジム・カーター主演の「カラテ」といったアメリカ映画などである。その種類はアクションものが中心で、しかも比較的あたらしい。これらのビデオ・カセットは、ダーウィンで購入することが多い。

表6 ブルンブルン BulunBulun 氏の保有財

分類	1984年	86年(特に加わったもの)	88年(特に加わったもの)
狩猟採集具	ライフル1, 散弾銃1, 散弾1箱, 山刀1, ナイフ2 オノ1, *鉄棒2, 釣糸3 犬1匹		
野生食糧	カメ5匹(生体のまま一時的に貯蔵)		
マーケット・フーズ	小麦粉缶1, コンビーフ缶3, 塩1箱, 粉ミルク缶2 砂糖4袋, 紅茶2箱, タバコ缶4		
衣類	男女衣類多数(Tシャツ, 半ズボン, パンツ, ワンピース, スカート, パンティ, ブラジャーなど), 帽子(女性用)2		
耐久消費財	ラジオカセット・デッキ1	冷蔵庫(利用機会なし)1, 扇風機1, 発電機(故障)1, テレビ1, ビデオ・デッキ1	トラック(故障)1, ラジオ カセット・デッキ2
生活雑貨	カップ4, **ビリー缶4, フライパン1, アルミトレイ1, ポリエチレン水タンク3, きせる1, 懐中電燈2, ランプ1, 洗面器2, 洗濯カゴ1, 洗濯洗剤1箱 石鹸4, 歯ブラシ1, 鏡(破片)1, 蚊とり線香1箱 蚊よけ薬1缶, ズック靴2 足, ゴム草履1足, カバン3, トランク4, ハンドバック1, カセット・テープ13, ノコギリ1, 自動車用蓄電池8	電球3, 電気コード3	
住まい	トタンの家屋2, ナイロンテント1, 天幕2, ウレタンマット2, 毛布4, シーツ5, 枕3, カヤ3, 牛皮の敷物1	発電機小屋(損壊)1	
儀礼用具	ブーメラン1対, 「星まつり」のボール2本, 木製ラップ1, 儀礼用編み袋2		
木皮画など 工芸品製作用具	木皮画用樹皮8枚, 顔料多数, 顔料用のすり石3, 筆8本, 糊2缶, ナイフ2		

表の分類にある「野生食糧」と「儀礼用具」, および「工芸品製作用具」のうちの樹皮, 顔料, すり石を除く他のすべての「もの」は, 購入された財である。

* 鉄棒; カメ猟の際, 土中にひそむカメをさぐるのに使用。

** ビリー缶; プリキ製の湯わかし。

9月からの1年間、売却した木皮画は11枚)。さらにウヌウン氏には、自身と2人の妻への失業保険金をあわせて、年間14,300ドル(143万円)が支給されている。これにもとづいて、彼もまた55品目80点あまりの生活財を保有する。そのなかで88年に彼が購入したおもな耐久消費財には、テレビとビデオ・デッキのセット、4輪駆動のトラック、自転車と三輪車がある。これを保有するにいたった動機は、彼によると、テレビは一般放送(1チャンネルのみ)が86年から受信できるようになったこととビデオ映画を鑑賞するためであり、トラックは狩猟などのときの移動をたすけるため、三輪車と自転車とはプロミスト・ワイフであるワイマンパとのあいだに生れたジュンジュロにせがまれたからである(表7)。

このウヌウン氏とブルンブルン氏の保有財をくらべると、両氏が保有する品目の種類には統計的な差がみられない。しかしその量には0.1%レベル($\chi^2=11.90$)で有意な差が認められる。この量の差は、両氏の都市での生活経験の有無を反映したものである。つまり、白人社会にあこがれはしたもののそこからのがれ、アウトステーション建設に従事したウヌウン氏には、比較的に実用性のたかい財を選択的に購入できるような生活経験があった。これに対してブルンブルン氏は、都市生活の経験をもたない反面、大都市の博物館などで開催される木皮画の展覧会などをおして、都市をおとずれる機会を最近になって多くもつようになった。その結果、彼は雑多な財を数多く保持することで、白人的な生活をとりこもうとしているようにみられるのである。

しかし、保有財にみられる量の差を、都市での生活経験の有無にのみ求めるのは危険かもしれない。なぜなら、ガマディの成員で都市生活の経験がないガジャオウラ氏は、いまだにトタンの家屋をもたず(表7)、その保有財34品目45点は「むら」での生活に必要な最少限のものに限られている。その質と量から彼は、可搬性のあるものが価値がたかい [WARNER 1964: 135-138] という、「もの」に関する従来の価値観をなお保持しているともいえるからである。

しかし、これにも留保が必要である。なぜならば、木皮画や彫刻による彼の収入は、近年になって増加してきたとはいえ、86年1月からの1年間でも2,000ドル(20万円)にすぎないからである(失業保険金は妻とあわせて年間8,700ドル)。

これらの事実は、アウトステーションに暮らすアポリジニの保有財についての、つぎのような推定を可能にする。都市での生活経験をもつ場合には、保有財を選択的に購入する傾向がある。それに対して、その経験をもたない者で、都市への頻繁な旅行を体験している場合には数多くの雑多な財を保有するが、その経験さえもたない場合

表7 ウヌウン WunuWun, ガジャオウラ Gadjaowra 両氏の保有財

分類	ウヌウン氏		ガジャオウラ氏	
	1986年	88年 (特に加わったもの)	1986年	88年 (特に加わったもの)
狩猟採集具	散弾銃1, 漁網1, ヤス1, 山刀1, ナイフ1, オノ1, 犬4匹		散弾銃1, ヤス2, ナイフ1, オノ1, 鉄棒1, 犬2匹	
野生食糧	カササギガン1羽 (一時的に飼育)			カメ37匹(雨季の食糧として)
マーケット・フーズ	小麦粉5袋, 紅茶1箱, 粉ミルク缶1, 缶詰類5, 砂糖3袋		小麦粉1袋, 砂糖1袋, 紅茶1箱	
衣類	男女衣類多数(Tシャツ, 半ズボン, パンツ, ワンピース, スカート, パンティブラジャーなど)		男女衣類多数(Tシャツ, 半ズボン, パンツ, ワンピース, スカート, パンティ, ブラジャーなど)	
耐久消費財	トラック(ガンダディラが使用)1, ラジオカセット・デッキ1, 無線電話1	トラック1, 自転車2, 三輪車2, テレビ・アンテナ1, テレビ1, ビデオ・デッキ1, 発電機1		
生活雑貨	カップ3, ビリー缶2, ポリエチレン水タンク2, させる1, トランプ1, 懐中電燈1, ランプ1, 洗濯洗剤1箱, 石鹸2, 蚊とり線香1箱, 虫よけ薬2缶, ズック靴1足, ゴム草履2足, トランク1, 自動車用蓄電池5	電気コード2, ビデオ・カセットテープ15, 携帯用保冷箱1, *ジェリー缶3	カップ2, ビリー缶1, ポリエチレン水タンク1, させる1, 懐中電燈1, ランプ1, 洗濯洗剤1, ゴム草履2足, ノコギリ1	
住まい	トタンの家屋2, ウレタンマット3, ビニールシート1, 毛布3, シーツ3, 枕1, カヤ2	ベッド(マットなし)1	ナイロントtent1, ウレタンマット1, 毛布2, シーツ2, 枕1	天幕1
儀礼用具	儀礼用編み袋1, 木製ヤリ3本, ヤリの素材5本		儀礼用編み袋1, ヤリ投げ器1	
木皮面など工芸品製作用具	顔料多数, 顔料用のすり石1, 筆3本, 糊1缶, ナイフ2本		筆5本, ナイフ2本, ノミ2丁, 包丁1本, サンドペーパー1巻	

* ジェリー缶; ガソリンまたは軽油を一時的に貯える 18ℓ入りの缶。

には、ほとんど財を保有しない傾向を示すという推定である。いずれにしても、生活経験は保有財のありかたに反映されるといえよう。

生活史が明らかにする3つめは、「むら」つまりアウトステーションの次世代への継承である。アウトステーション運動という歴史的な状況のなかで、ウヌウン氏がガマディ建設を決意したのは、30歳代後半である。それから二十数年を経た現在、ガマディに暮らすブルンブルン氏は、いまあらたに「むら」の建設を計画している。その場所は、ジンバ族ゲナルピング Guanabingu 氏族である彼の故地、アラフラ湿地の東縁である。そこに「むら」をつくり、彼の兄弟姉妹とその家族とが一緒に生活する計画で、ブルンブルン氏はすでに彼らの同意をえているという。

これが実現するか否かは別としても、彼の計画は、アウトステーション運動の次世代への継承を意味する。さらに興味深いのは、彼（ブルンブルン氏）がウヌウン氏と同じく30歳代後半に「むら」建設の決意をかためていることである。それは、さきの木皮画の製作時期に示唆された自らの文化へのこだわりを思いおこさせる。彼らは、この年齢段階にいたると、類似の思考ないし社会的イメージとでもいうべきものをいだきはじめるのだろうか。

アボリジニの一生は、最初の成人儀礼につづくいくつかの儀礼を経て、社会的な役割や神話に関する知識を獲得していく年齢段階——子供、若者、成人初期、成人、長老といったような——を移っていくのが一般的だとされる [ELKIN 1981: 201-213; BERNDT and BERNDT 1985: 211-214]。成人ないし長老の年齢段階に到達し、多くの神話に関する知識をもつにいたったアボリジニは、故地への愛着 [PETERSON 1975: 60-63] の意識を顕在化させていくのではないだろうか。

アウトステーションの建設計画をこうした心情のあらわれとみれば、彼らの固有の価値体系——現実の世界であると同時に祖先の精霊の世界でもある故地を、自らの存在のよりどころとする価値の体系——は、なお将来にわたって維持されると予測できるのである。そして、この体系が維持される限り、狩猟動物に食糧のいくらかを求め、クランの神話などを描いた木皮画を製作し、成人儀礼や「星まつり」などの儀礼をおこなう生活がつづけられるものと思われる。

4. ま と め

ガマディ「むら」の2人の生活史からは今世紀におけるアーネムランド・アボリジニの生活の変化の一端が知られた。その近年における変化、とりわけ60年代末から70

年代にかけての故地でのアウトステーション建設の動きは、彼らが狩猟採集に基礎をおく生活を意図的に選択しようとしていることを暗示する。そしてその生活のなかで、彼らは神話やドリーミング（トーテム）にモチーフを求めた木皮画を製作し、その背後にある遠い祖先の時代から変ることのない神話を語り、自らの文化の存在を確認する。さらに彼らは、この木皮画の販売をとおして自民族文化を対外的に主張すると同時に、貨幣経済へのあらたな対応の方途をみいだしはじめている。こうしたアウトステーションでの生活が国家にあとおされたものであるとはいえ、あるいはそれゆえに、その次世代への継承は、彼らの今後の生活文化におおきくかつ直接的な影響をもたらすものと予測される。

これまで述べてきたこの生活史は、冒頭に記した多くの制約をかかえている。それにもかかわらず、2人が語ることがからは、上のような予測が可能である。それが当をえたものであるかどうかは、次世代の彼らの子供の生活体験を記述することで明らかになるであろう。その意味でこの報告は、生活史にもとづいてアーネムランド・アボリジニの文化変容を論ずるための、筆者の試みのひとつである。

付 記

この報告のもとになった資料は、1982・84・86年度の文部省科学研究費海外学術調査（研究代表者・国立民族学博物館 小山修三氏）、および88年度と同調査（代表者は筆者）によってえたものである。

文 献

- ALTMAN, J. C.
 1982 *Maningrida Outstations: A Preliminary Economic Overview*. In E. A. Young and E. K. Fisk (eds.), *The Aboriginal Component in the Australian Economy: Small Rural Communities*, Canberra: Development Studies Centre, Australian National University, pp. 1-42.
 1987 *Hunter-Gatherers Today: An Aboriginal Economy in North Australia*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- BERNDT, C. H.
 1984 (1982) *Sickness and Health in Western Arnhem Land: A Traditional Perspective*. In J. Reid (ed.), *Body, Land and Spirit*, Queensland: University of Queensland Press, pp. 121-138.
- BERNDT, R. M. and C. H. BERNDT
 1985 (1964) *The World of the First Australians: Aboriginal Traditional Life: Past and Present*. Adelaide: Rigby Publishers.
- BORSBOOM, A. P.
 1978 *Maradjiri: A Modern Ritual Complex in Arnhem Land, North Australia*. Nijmegen: Centrale Reprografie Directoraat A-Faculteiten Katholieke Universiteit.

松山 アーネムランド・アボリジニの生活史

COLE, K.

1975 *A History of Oenpelli*. Darwin: Nungalinga Publications.

1979 *The Aborigines of Arnhem Land*. Adelaide: Rigby Limited.

COOMBS, H. C.

1978 *Kulinma: Listening to Aboriginal Australians*. Canberra: Australian National University Press.

ELKIN, A. P.

1981 (1938) *The Australian Aborigines*. Sydney: Angus & Robertson Publishers.

FISK, E. K.

1985 *The Aboriginal Economy in Town and Country*. Sydney: George Allen & Unwin.

GOULD, R. A., D. D. FOWLER and C. S. FOWLER

1972 *Diggers and Doggers: Parallel Failures in Economic Acculturation*. *Southwestern Journal of Anthropological Research*.

HEPPELL, M.

1979 Introduction: Past and Present Approaches and Future Trends in Aboriginal Housing. In M. Heppell (ed.), *A Black Reality: Aboriginal Camps and Housing in Remote Australia*, Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies, pp. 1-64.

小山修三

1983 「中部アーネムランドにおけるオーストラリア・アボリジン社会の現状(1)アウトステーションの形成と分布」『日本民族学会第22回研究大会研究発表抄録』pp. 56-57。

1988 「オーストラリア・アボリジニ社会再編成の人口論的考察」『国立民族学博物館研究報告』13(1): 37-68。

KYLE-LITTLE, S.

1957 *Whispering Wind: Adventures in Arnhem Land*. London: Hutchinson.

松山利夫

1986 「アーネムランドの葬送儀礼」『季刊オセアニア』7: 12-14。

1988a 「アーネムランド・アボリジニ, ジナン族の狩猟と食物規制」『国立民族学博物館研究報告』12(3): 613-646。

1988b 「アーネムランド・アボリジニ, ジナン族の星まつり——国立民族学博物館海外映像音響資料収集の記録——」『国立民族学博物館研究報告』13(2): 407-435。

McKENZIE, M.

1976 *Mission to Arnhem Land*. Adelaide: Rigby Limited.

MEEHAN, B. and R. JONES

1980 *The Outstation Movement and Hints of a White Backlash*. In R. Jones (ed.), *Northern Australia: Options and Implications*, Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University, pp. 131-157.

MILLS, C. W.

1959 *The Sociological Imagination*. New York: Oxford University Press.

MORPHY, H.

1978 Rights in Paintings and Rights in Women: A Consideration of some of the Basic Problems posed by the Asymmetry of the Murngin System. *Mankind* 11(3): 208-219.

MURPHY, R.

1979 *An Overture to Social Anthropology*. New Jersey: Prentice-Hall.

MURPHY, R. and J. STEWARD

1968 *Tappers and Trappers: Parallel Process in Acculturation*. In Y. A. Cohen (ed.), *Man in Adaptation: The Cultural Present*, Chicago: Aldine, pp. 215-233.

成田弘成

1989 「オーストラリア・エスニック政策の試練—転換期を迎えるアボリジニー行政とその展望—」『族』11: 1-19。

PETERSON, N.

1975 *Hunter-Gatherer Territoriality: The Perspective from Australia*. *American Anthro-*

- pologist* 77: 53–68.
- 1976 Mortuary Customs of Northeast Arnhem Land: An Account Compiled from Donald Thomson's Fieldnotes. *Memories of the National Museum of Victoria* 37: 97–108.
- 1982 Aboriginal Land Rights in the Northern Territory of Australia. In E. Leacock & R. Lee (eds.), *Politics and History in Band Societies*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 441–462.
- 関根政美
1988 「アボリジニ」 関根政美・鈴木雄雅・竹田いさみ・加賀爪優・諏訪康雄 『概説オーストラリア史』 有斐閣選書, pp. 298–318。
- SHAW, B.
1986 *Countrymen: The Life Histories of four Aboriginal Men as told to Bruce Shaw*. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- 新保 満
1980 『オーストラリアの原住民——ある未開社会の崩壊——』 日本放送出版協会。
- TINDALE, N. B.
1974 *Aboriginal Tribes of Australia: Their Terrain, Environmental Controls, Distribution, Limits and Proper Names*. Berkeley: University of California Press.
- WARNER, W. L.
1964 (1937) *A Black Civilization: A Social Study of an Australian Tribe* (Harper Torchbook Edition). New York: Harper & Row Publishers.